

邁進するにあらざれば、到底本邦の世界的位置を保存すること不可能である。

然るに一般に國民の意向を見るに、今尙歐米の文化に感溺し、何でも歐米諸國の尻馬に乗るにあらざれば、世界の氣勢に遅るるが如き考を以て、夢中になつて居ることは、眞に悲哀に堪えざる次第である。現に歐米の社會が、行き詰れる現狀に困り抜いて居るのに、之れを考慮せずして、矢鱈に彼等の尻馬に乗つて、平然たるはよく／＼目先の見えぬ皮相國民である。而も自國に卓越せる大價值・大文化の實在するに拘はらず、毫も爰に氣附かざるは、眞に愚の骨頂と云ふべきである。世界の何れも有せざる千古不磨の要素と、之れに附帶する大價値的文化を有する以上は、當然之れを培養し、發育せしむることは、尤も的確にして且安全なる方策である。故に早く茲に目覺めて、科學的研究を積み、根底ある大價値的文化を發揚し、以て社會國家の安寧福祉を増進すべきである。現に從來に於ても我等の祖先並に同胞が、縱令外國文化の模倣に甘んぜし當時に於てさえ、其同

化作用は、相應に外國人のそれに比して、出色ありし程なれば、況して自國固有の精神文化を自覺し、之れを専心培養することに盡瘁せば、其成果は必ずや刮目して見るべきものと思ふのである。殊に我國民は、大祖先の昔より、特に科學的才能に秀でしものである。之れは畢竟するに、國土の自然が、然らしめたものと思ふのである。即ち悠久の昔より、火山列島に居住し、海國的生活に馴致し來れる、大和民族の凡てが、常時特異の自然現象に接觸せし結果、知らず識らず科學的考察と、感覺的經驗に超越鋭敏なるは、當然の事相である。隨て我等の大祖先が、最も勇敢に且詩人的に、而も運命を物とせず、能く自己の力と心とを信じて勇往邁進し、神の業まで向上しつゝ努力せしことは、頗る味ふべきことで、この信念と知力とは現代の吾人にまで、遺傳し居ることなれば、教化の方法と政治の方策さえ宜しければ、吾人は何處迄も、進取的に積極的に、勇往邁進し得るものである。

幾度も云ふ如く、今日の行き詰まれる時局を救済せんには、是非とも爰に目覺めて、新規時直しの考を以て、更始一新の實を擧ぐべきである。就中經濟政策の刷新復興を以て、最大急務とするものである。然るに現在の政治家を始め、學者教育家・實業家の何れも、心の根底から茲に目覺めざる爲め、口だけ更始一新を唱ふるも、行爲は一切之れと反對するの、滑稽を演出するは、眞に情けなき次第である。目下普通選舉の實施と同時に、政治の改新には、多少の期待を持つて居る様に見ゆるが、之れと反對に最も肝要なる、經濟政策の根本的改善刷新に何等の計畫なく、今尙歐米の靡爛的弊竇に追隨し、全然武陵桃源境裏の夢に耽けり居るの觀あるは、眞に吞氣千萬と言はねばならぬ。

刻下の急務に就て

本篇は大正三年五月九日長崎市三菱職工學校に開催せられし九州沖繩工業學校校長及び女子實業學校長協議會に寄送せし意見書である。

御會同の諸君中、古いお詫みの方々には、御承知下さる通りに、私は貴協會創立に對する、産婆役の一人でありますから、貴協會には深い緣故がありますので何時も深厚なる好意を表するのみならず、彌増しに貴協會の發展を希望するものであります。別して現下の如き國運に際會致しましては、貴會の振興は、九州沖繩地方に於ける、斯種教育振興の、一大原動力なるは勿論、延いて全國同種教育事業にも、一大影響を與ふる次第でありますから、今回の御會同に付きましても一段の賛意と期待とを有するものであります。

現下の國運上一大憂患と認むる事相は、惡思想・偽文化の浸潤跳梁であります。

此害毒蔓延の源因は素より一にして足らざるものでありませうが、現今に於ける學校教育の缺陷は、確かに其一大要因たることを認むる次第であります。其缺陷とは取りも直さず、大定員中等學校の濫設であります。中等教育の一大使命は、最も感激性の旺盛なる青少年に、眞摯適切なる訓化を施すことであります。此訓化を施すに付ては、一中等學校生徒定員數に、適當なる制限を設けることが、最大必要條件であります。學校は一個の家庭的教育集團でありますから、其家長並に上長者に當るべき校長以下職員は、渾和統一せる有力なる訓化の中心原動力として、充分生徒に直面親接することが肝要であります。如何に立派なる人格者でありましても、其直接の感化力には、自ら限度があります。隨て其感化の中心となるべき職員の数にも、自然適當の限度があつて、其處に眞の渾和統一が保たれる譯であります。然るに今日の中學校の如く、一校の生徒員數を千人乃至千二百人とし、之を率ゆる職員の数も、四十人前後となる様にては、到底其中心團體が

渾全統一せる原勢力を保ち得ること、困難でありまして、隨て千人乃至千二百人の生徒に、徹底的薰化の實を擧ぐることに、不可能であります。中等學校に於ける師弟の關係が、圓滿に親密に、恰も親子の如く兄弟の如く、保持せらるる爲めに其生徒の情操も、穩健着實に發揚し、それが頓て渾然たる人格の中樞となつて、向上するものでありますのに、今日の如き大多數の生徒を收容する中學校に於ては、到底師弟間に純眞なる情誼を啓培するは不可能であります。同時に動もすると生徒は多數を頼んで、職員に反抗を試みることとなりまして、此反抗的思想が遂に鬭争的氣分を培養し、頓て外來の惡思想・僞文化に感染することとなるのであります。此事に付私が平素敬服する所の、九州帝國大學教授河村幹雄氏も頗る同感で、嚮きに「小定員學校論」と題せる小冊子を發刊し、大に其主張を高調せられました。試みに其中の一二齣を摘載致しますと

「學校ストライキには百面百様の源因がありませうが、要するに師弟の親和せ

ざる處より起るものであります、親子の親み合ふ家庭にストライキは起りませぬ、學校は一つの家庭であります、隨て學校が眞に學校である限り、ストライキは有り得べからざるものであります、然るに我國に此の有り得べからざる學校ストライキの起るのは學校にして學校ならざるもの、即ち家庭ならざる學校の多いことを物語つて居るのであります、(中略)學校は家庭であり又國家であります、教師は父母であり、同時に主權者であります、然るにストライキに於ては生徒が學校と教師とに反抗する、即ち子が團結して親を排し、家庭を破壊し、人民が主權に反抗し、國家を亡すと同義であります、不忠不孝、大逆無道、言語同斷の所爲であります、是れ畢竟校内の心理が家族的でなくして、群集化して居るためであります、恐るべきは實に群集心理の發作であります、今日の社會主義運動の心理的特色は群集的であることであります、群集心理の支配する處には、此運動は常に成功します、社會主義運

動の隆盛を希ふ者は、隨處に群集心理を發生せしむべきであります、大定員學校は其絶好の機關であります』

と述べられて居ります。此所論は私は最初に述べました所の、現下に於ける惡思想・僞文化の浸潤發生の経路を見るに、其黴菌は最初に於て侵し易き病體、即ち大定員中等學校に於て培養せらるるものとの愚見と同じであります。

然るに幸にも實業學校の中で、工業學校、職業學校、農學校は、設備の上からも教育の點からも、止むなく比較的小定員である爲め、師弟の關係も自ら親和を保ち、家庭の如き親しみを含み居るので、此間に情操の陶冶も、意志の訓練も適當に行ふ事が出来るのであります。此關係は生徒が卒業の後迄も持續し、師弟の情誼が永しへに保持さるるから自然人格の修養が續けらるるのであります。世間の人は工業學校や職業學校は、單に技術教育を施す所であるから、人格の教育は不徹底であるなど、妄言するものもありますが、此等は所謂一を知つて二を知

らざる者と申さねばなりません。何故とならば小定員の實業學校なればこそ、眞の人格教育が出来得ると同時に、職業と道德・教育と生活とが實地に而も適切に體驗せらるゝので、所謂道德即生活・生活即教育（眞の全我の教育）を實現し居るからであります。換言すれば實際生活は道德的であらねばならぬと同時に、經濟的であるから、眞の全人教育・乃至綜合教育は、如上の小定員實業學校に於て始めて目的を達し得る事が出来るのであります。河村教授の云はるる如く『定員千二百人の中學校生徒は一年間には少くも十人の先生の手に係り、五年を通じて五十人を下らぬ先生に接するのである。而して五十人のどの先生も自分の名と顔と身上を充分に知つて下さつたとは信ぜずに過す時、生徒の先生に對する考が路傍の人と甚だしく異ならぬのは無理でない』のであります。然るに現在の工業學校女子職業學校、農學校は、幸にも比較的小定員で、恰も家庭的學校の如き親しみが保たれますので、自然趣味深い、情義の籠つた教育が施され、加ふるに其卒業

生の團體も、何處迄も兄弟同胞の關係を以て思想並に情誼の聯絡を計り、母校と相待ち、同窓相倚りて國家社會の一部中堅たる事が出来ますから、斯種の學校は祖國經營上最も有意義の施設であると同時に、新教育の衝に任せらるる當局者の責務は、一層重且大なるものと信ずるのであります。私は此意味から諸君は單に當該直面の教育事相に向つて邁進せらるる許りでなく、更に進んで諸君の學校并に卒業生の團體を以て、思想的にも實行的にも、祖國の皇運を扶翼し、祖國愛護の一大原動力たらしむべき指導と覺悟とに、彌増しの精進あらんことを切望する次第であります。

私は昨年小倉で開かれました貴會の席上で、弘法大師の綜藝種智院教育式記をお目に掛け申したことがあります。其中に就て大師の教育綱領とも云ふべき、四個條の第一項たる

「智を得るは仁者の處に在り」

『道を學ぶは衣食の資に在るべし』

との二項は斯種教育の眞髓を道破せしもので、而かもこれが眞の綜合的教育であるべきものと、今尙一層の感を強ふする次等であります。今の大定員中學校は到底此大切なる仁即ち慈愛を缺いで居るのであります。即ち純眞の愛情に乏しき無味乾燥なる、智識一邊の教育を、施すに過ぎざるものであります。然し圓融の智識は、仁愛の學園ならでは發育せぬものであります。孔子が論語の里仁篇に於て『仁に里⁺るを美とす、擇んで仁に處らずんば焉んぞ智を得ん』と云はれしことも這般の消息に外ならぬことと信じます。今の大定員中學校の如き場所には、斷じて全生徒の感激性を啓培すること不可能であります。干枯びたる無味空寂の處に何すれど人生の眞智識が發育しませうぞ。小定員學校なれば縱令偉大の仁者にあらざるも、全體の生徒に相當の感化を與ふる事が出來ます。斯くして仁愛の空氣

が盈ち居れば、其處から生るる智識は、必ず人間味を保有すること勿論であります。次に道を學ぶは衣食の資にあるべしとの意義は、道德即ち經濟・教育即ち生活で、仁愛から生れた正義、道德から生れた生活で、始めて教育の目的が達せられ、人生の意義が理解されることと信じますから、此處に深厚なる注意を拂ひ、愈々益々理想即現實、教育即生活の實果を發揚し、延ひて祖國の皇運を振張せしめらるる様、切に御盡瘁あらんことを切望致します。而もこれが刻下の時局に對する焦眉の急務と存じますから、何卒此度の御會同に於ては、這般の計畫に向つて充分御審議を凝らさるる様、重ねて囑望に堪えざるものであります。以上御挨拶に換へまして愚衷の一端を披歴致す次第に存じます。

開校滿二十年並に卒業生千人祝賀會に於て

當校は明治四十一年四月二十五日の開校に係り、本日は恰も滿二十年の開校記念日を迎へしと、同時に今年三月に於ける、第十八回の卒業生を通じて、其總員數千二十四人に達せしを以て、茲に卒業生諸氏の賛同を得て、祝賀會を開催せし處、縣内外に於ける知名紳士各位の來臨を辱ふせしことは、當校の最も幸榮とする所で、私よりも厚く感謝を表する次第である。

回顧すると今より三十二三年前の教育は、依然として舊來の形式に囚はれ、模倣主義並に偏人文主義の餘弊は、延ひて教育をして、實生活と没交渉ならしめ、教育の基調は、殆んど實生活の埒外に、放棄せられ、隨て其施設も自然質實眞摯を缺き、一切の教育を擧げて、殆んど形式空想に馳せしむるの有様であつた。然るに三井家の幹部諸氏は夙に教育改善の必要を認められ、學校教育は實生活を基

調となすにあらざれば、如何に學校を増設するも、國家社會に益なきのみか、或は却て教育即亡國の悲運を、招ぐやも保し難しとの卓見を抱かれ、此抱負から遂に實生活に即せる、中等程度の工業學校を當地に設置し、三池各事業所工場を割愛して、生徒の實驗實習機關に提供し、且此等所屬の技術者及び事務員をして、講師並に實習の指導に當られることとせしは、今より考ふれば、眞に先見の明に敬服する次第である。當校は如上の旨趣に由つて、設置せられし故に、教育の内容は勿論、一般の施設方法も、努めて時代の要求に順應すべく期待し居るのである。其一斑を述べれば、先づ第一に、秀才教育を標榜し、専ら生徒の個性を尊重し、其長所美點を伸張せしむるの方針を採り、次で從來教育上の一大弊竇と認めし、試験制度も文部省認可の下に、早くより撤廢し、何處迄も生徒の自由學習を獎勵し、以て其個性の伸展に、便宜と餘地とを與へ、同時に人格陶冶に重きを置き、現今漸く高調し來れる、勤勞教育乃至至全人教育は、夙に當校の強調せしもの

で、教授と訓練・學習と實習實驗とを、総合的に分科的に調和均齊せしめつゝ、而も訓育の基調を、祖國本來の皇道に率由し、國體の大生命に信順し、努めて道徳的批判力を訓練し、以て國家有爲の人材たり、工業家たらしむるを一意念願し居るは、敢て自家廣告にあらざること、開校以來陰に陽に、當校教育の實際を目標し、共鳴せらるゝ世間識者の承認せらるゝ所と信ずる次第である。當校は以上の期待を實現せんが爲め、開校當初より、生徒の員數を制減し、教師の指導にも、生徒の學習にも、便宜と餘地とを與へ、努めて量の教育よりは、質の教育に専心留意し居ることも、敢て誇張の言にあらざることである。

當校は此計畫の下に、終始一貫して全職員の共鳴同力の下に、二十年間努力奮勵を續け來りし爲め、漸次一般社會の認むる所となりまして、學校の存在も卒業生の採用も、年と與に高まりつゝあることは、私共の感激に堪えざる次第で、畢竟同情厚き工業社會の援助と、竝に當校に好意を寄せらるゝ有識者各位の庇護の

賜と存じまして、衷心感謝に堪えざる次第である。されば當校職員は今後一層の努力と感謝の意味を以て、世間の厚意に酬ひ、彌々益々當校の聲價を揚ぐることに勇往邁進を期する次第であります。

次に私は當校を代表して、卒業生諸君に對し深厚なる感謝の意を表したいと思ひます。當校卒業生の多數は、能く當校教育の旨趣に循ひ、常に各自の研究努力を續けらるゝと同時に、能く所屬の工場なり會社なりの事業に勵精せられ、以て母校の信用と諸君各自の聲價とを高めつゝあることは、諸君の從屬せらるゝ會社工場より、常に報道せらるゝ事實に由つて、私共一同が秘かに喜悅に湛えて居る次第である。且諸君は私的に母校に對する感謝の意味を以て、常に好意を寄せらるゝことも、亦私共の常に感激に堪えざる所である。試みに其一端を摘み舉ぐれば、當校十週年の祝賀會には、當時在職滿十年に相當せし數名の職員に、鄭重なる記念品を贈られ、同滿十五年の祝賀會には、ピアノ壹臺を母校に寄贈せらるゝ

と同時に、在職滿十年の職員數名に、前回同様の記念品を贈呈せられ、大正十四年には卒業生一同發起の下に、朝野名士の賛同を得て私の爲めに盛大なる祝賀會を開催せられしは、私の終身感銘して忘るゝ能はざる次第である。加ふるに今回滿二十年の祝賀會を開催せられ、前回と同じく在職滿十年の職員七名に記念品を贈呈せられ、併せて開校以來勤続せる三名の使丁にまで記念品を贈呈せらるゝなど、諸君が知恩感謝の信念に厚き程に、私共の感銘措く能はざる次第である。之を以て類推するときに、諸君は母校に對する知恩感謝の奉仕的信念と行爲とは、必ずや諸君の從屬する會社工場其他に對しても、より以上に知恩感謝の信念を以て、彌増しに忠實なる奉仕を遂げ居らるることを推知することが出來ると同時に、諸君の如き篤志有爲の卒業生を輩出せし爲めに、當校設立者の素志に酬ひ得ることを喜ぶ次第である。然し私は所謂寵を得て蜀を望むと云ふ古い諺の下に、今一層諸君に囑望せんとするものがある。それは諸君が現在に於ける努力と覺悟

とを今一層向上伸展せられたきことである。換言すれば諸君が職務に於ける事業の能率増進と、諸君自身の智徳修養とに、今一段の自覺奮勵を加へられんことである。諸君の中には恐らく諸君の現状に満足せらるゝが如き者あらざるべきも、社會の事態は凡て日に新に日に進みつゝあるのである。安心は所謂出世の行詰りで、苟も小成微功に安んずるが如き油斷心が起る様にては、日進月歩の工業界に必ず落伍者となり、更に大にしては列國競争場裡に馳驅する、祖國工業界の衰頹を招來する原因ともなるから、努めて油斷なき態度を以て勇往邁進すべきである。縱令日常の業務に對し、既に改善の餘地なしと認むることにても、更に細心研究を積まんには、必ずや改良工夫に氣附くに至るものと思ふのである。私自身の経験から申上げて恐らく間違ひはなからうと思ふのである。私は今尙研究を續けておる我皇道の本義と、此本義を基調とする祖國の教育に付、日夜絶えず研究を續けて居るが、人は一口に我「神ながらの道」と云へば、至極簡明直截の様と思

ひ、隨て其文獻史籍も甚だ微々たるものなれば、研究の餘地は、殆んど盡きて居るかの如き、口吻を洩らさるゝも、研究をすれば研究する程、深遠無窮にして、殆んど未だに津涯の一端をも、窺ひ知る能はざる次第である。之れと同様に諸君の従事する工業の凡てに對しても、最早改善の餘地なしと思ふ程なる些細の末に至るまで、必ず尙研究工夫の餘地多かるべきを以て、茲に留意せられ、努めて細心の注意と、深刻なる研究的態度を保持せられ、内にしては諸君各自の智能徳操を向上し、外にしては所屬の事業に彌増しに能率を増進せしめ、以て祖國工業界の發展向上に、一段の精進あらんことを切望に堪えざる次第である。

次に諸君の職務以外の點に於て一段の希望がある。そは他にあらず我祖國の現狀は眞に寒心に堪えざるものがある。即ち惡思想・僞文化の澎湃として押し寄せ來る害毒は、將に祖國の大生命をも傷け害はんとするの危険に瀕しつゝあるのである。此の如き逆境悲運に接觸せしは、其原因素より一にして足らざるべきも、要

するに我國民が擧げて祖國の皇道を忘却し、有頂天となつて濫りに外國の文化に心酔せし餘弊の致す所である。故に今日の場合に於て、外來の惡思想を防壓し、僞文化を撃退せんとするには、國民を擧げて眞に皇道の純精神に目覺めしめ、且其信念を高調し、實行を獎勵し、更に進んで皇道の精華芬芳を以て、外來思想を醇和淨化せしむることが最も大切である。我皇道は開闢以來幾度も此等の試練に打勝ち、能く外來文化の思潮を淨化醇和せし事實は史上顯著の實例がある。實に我皇道の大生命は至純至精にして、而も其靈化力の旺盛なるものなれば、國民一致の覺悟を以てせば、如何なる思潮も遂に淨化し得べきを以て、諸氏に於て我等が、終始一貫して、高調強鳴せる、祖國教化の本義を基調とし、愈々皇道の眞精神に目覺め、之を以て各自の信念を高調し、人格を向上し、彌増しに精進邁往せば、當校卒業生千人の一致團結せる精神氣魄は、必ずや外來の惡思想・僞文化の折伏と、淨化とに相應の効果を擧ぐるに相違ないと思ふのである。我明治維新の

大改新に際して、當時全國所在の義人節士が、少數ながらも東西相應じ、親疎相扶け、一致團結して、王政復古の礎業に培ひしことが、頓て大維新の宏業を成就せしことを考ふる時に、當校千人の卒業生が、一致團結して精神的に皇道の擁護者を以て自任する上は、必ずや他の同志をも、促興するの原動力となること、信じて疑はざる所である。三井家が當校を設置せし深意は、單に平和の際に於て、工業界の爲めに貢獻せしむるのみならず、延て皇運の扶翼と、祖國危急の場合に臨み、其救護の礎石たり柱梁たり得る底の、奉仕者たることの期待あるやも、回顧せねばならぬ次第と思はる。私は斯くありてこそ、始めて當校卒業生の、眞價と信用とを、彌増しに發揮し得るものと思ふのである。隨て今回開催せられし祝賀會の眞意義も、恐らく這般の希望と、意義とを物語り居るにあらずやと、秘かに考察する次第である。

以上所感を述べて、今日の盛典を祝福する言葉に代へた次第である。

日本の教育學は是非とも和製でなければならぬ

明治の新政は、王政復古の一大目的を遂行せし、千古の一大奇蹟であるから、素より慶賀に堪えざることであるが、何事も更始一新と云ふ、一本調子に乗せられて、百般の制度文物を無批判的に歐米諸國に模倣せし爲め、其結果何物でも舶來品でなければ、納まらぬと云ふ始末で、而も國民の精神即ち『たましひ』の教育まで外國に模倣し、恬として怪しまざりしは、沙汰の限りと云はねばならぬ。勿論日用物品の如きは、彼等は夙に科學的知識を、製作工業に應用せし爲め、自然精巧の機械を發明し、其利用と熟練とは、次第に精巧の製品を産出し、而も大企業の下に、専心多量製産に従事せし結果、製品の價格も、比較的安價となりしを以て、自然其需要を高潮せしめしも、唯不可思議に堪えざることは、前述の如く自國々民の教育制度、及其施設に至るまで、一切歐米諸國に模倣し、崇拜心

酔の甚だしき、遂に本邦固有の價值ある、一切の文化を忘却し、恬として顧みざるに至りしことは、歎ずべきの極みである。

此頃某教育學者は、某市の講演會に於て、和製の體驗教育學なるものありと、暗に冷笑的口吻を洩らされしが、これは多分生半可に、『デルタイ』派の教育學を、加味應用せし教育學を指せしもので、本物の體驗教育學でないとの、批判なりしならんも、勿論其和製體驗教育學が、果して如何なる價值あるや否やは、余の關する所にあらざるも、祖國に於ける精神科學は、是非とも祖國民族の本性實質に、基調を置くべきことは、學科其物の本質上から考へても、當然のことであるから、これに屬する教育學は、是非とも大和民族の族性と、これより發達せし祖國の歴史哲學、並に一般的精神科學より組織すること、當然の歸結と信じ居るのに、前某氏を始め現在の教育學者が、揃ひも揃つて夢我夢中に、歐米の教育學者の糟粕を嘗むるを能事とし、一にも歐米二にも歐米と、彼等の後塵を禮拜し、尊重する

の奇觀には、眞に慄慄に堪えざる次第である。

此の如き狀況であるから、教員養成の大本山なる、高等師範學校に於ける教育學は勿論、大學に於ける教育講座、並に精神科學に屬する講堂は、一切歐米主義の當該學者が獨占する爲めに、吾人をして異様の感を惹起さしむるものである。

教員養成の大本山が、此の通りであるから、文部省の教育學檢定に於ても、其考查は一切歐米主義の教育學説のみを試験し、祖國の教育學とも云ふべき學説は、絶無の有様である。特に教育史の如きは、是非とも祖國の教育史を、最も的確に教授するを以て要とすべきに、唯ホンの申譯に課する丈で、眞に祖國教育史の正鵠を認め、眞髓を捉ふるが如き講義は、皆無と云つて宜しい有様である。故に余は常に言ふ、若し余をして現在の文部省教育學檢定委員、及び教育學専門の大學教授其他高等師範學校教授等を集めて、教育學の檢定をなさしむるならば、恐らく一人も合格するものなかるべしと、何を以て斯く言ふとならば、現在大學に於

て、教育學講座を受持つ學者、並に高等師範學校に於て教育學を擔當する教官を瞥見するに、何れも祖國固有の哲學、文藝並に教育史は勿論、之れと密接不離の關係を有する東洋特有の文獻に、深奥なる研究を積まれたるものを、聞かざるを以てである。

祖國の教育は、祖國民固有の精神氣魄を、國家肇造の根本原理、並に生命を基調とする實理に由つて、啓發陶冶すべきものなれば、隨て其教育學原理も、基調を此處に置かねばならぬものである。(拙著體系的國體新論を參照ありたし) 祖國の政治なり經濟なり藝術なり國防なり、皆祖國特有の絶對的價値より生るべきものなる上は、況して大和民族の生々發展に由つて構成されたる、精神科學の眞髓要素は、當然祖國に於ける教育學の母體たり本源たるべき道理なるに、毫も此處に氣附かずして、民族を異にし、歴史を異にし、風俗習慣其他一切の、生活事相を異にせる歐米諸國、及び其學界に發生せし、精神科學並に其一分科とも云ふべ

き教育學説を以て、直ちに祖國の教育原理並に方法に擬するは、所謂木に竹を接ぐが如きものである。或は言はん教育上普遍の原理は、洋の東西を問はず、時の古今を論ぜず同一なりと、果して然らば祖國固有の精神科學も、同じく普遍原理に相違なかるべしと思ふ。何となれば肇國以來既に三千年の久しきに亘りて、生々發展せし民族的精神氣魄は、寧ろ世界の何れにも、其匹儔を見ざる底の、特殊の價値ある文化を現出し居る程なれば、隨て其科學的原理は、必ずや普遍的實理たること、立證して餘りあるものと言ふべきである。されば歐米の學説を攝取するに付ても、先づ以て祖國の教化原理を軌範として、充分に其價値を批判すべきである。明治天皇の「知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」と仰出されしも、蓋し此義に外ならぬこと、信ずべきに、本を忘れ末に走り、單に外國學者の後塵を拜し、糟粕を嘗むるに汲々とし、肝腎なる皇基の振起を忘却し居ることは、眞に笑ふべき極みである。

此傾向は要するに現在祖國の一般精神科學者、並に教育學者等が、奥深く自國の文化と經典とに造詣せざる爲め、自然其真相實質を身得する能はざるの過失と思ふのである。若し此等の學者が醒覺一番して、我皇道即ち惟神の大哲理を攻究し、深奥なる偉大の價値を認めなば、必然我民族の歴史的文献資料が、歐米諸國のそれに比して、遙かに優越なるを實感し、其處に蔚然たる、教育學並に精神科學を發見し得べく思はるのである。例へば太古に於ける、『まつり』の形式たる、禊と祓と拜の禮法の如き、又其『まつり』の内容並に意義の如き、又血統を重んずるの精神及び習慣の如きは、如何に意義深き方法なるかを察知し得ると同時に、現今歐米の學者間に於て、切りに持て囃さるゝ生理學の原理が、夙に我等の祖先に於て體験的に、實證せられしを想見し得るのである。又古代の産業の指導並に其施設が、恰も現在の實業教育の根底とも云ふべき、先驗的事實に基けるものなることが、知らるるものである。更に武士道の精華が、一に武士の家庭教育に於

て徹底的に啓發醗酵せられ、而も其内容並に形式の深遠高尚なりしが如きは、恐らく他國に其類例を見ざることと信ずるのである。(然るに現今の教育家は恐らく此實相を知らざるものと思はる)又現今血液研究の結果、人生と血液との關係、並に其理論は醫家の金石鼎彝として珍重するものなれど、實は我祖先は三千年前の昔に於て、疾くに體験的に考察身得して、之を結婚嫁娶と、教育とに密接なる關係に置きたるが如きは、眞に驚くの外なく、又本邦古代に於ける藝術教育は、是亦恐らく本邦特有の教育法として、現在歐米人の想像も及ばざることと思ふのである。即ち上古吾人の祖先が、歌を以て自己の意志感情を發表し、以て萬事を暗示し諷諭せし爲め、其教育と遺傳とは、子孫をして一般に詩藻を有する國民たらしめ、今日に至るも歐米人をして、日本人は詩の國民なりと感賞せしむるが如きは、特に推奨に値するものである。又本邦の私塾制度は一種の教育施設方法にして、其處に教化と道德とを、密接不離の關係に置かしめたるも、勿論特色ある

教育の一事相である。殊に感ずべきことは、基礎の教育即ち初等教育に於て、女子の教育は男性の師傅専ら之に當り、男子の教育は女性の師傅専ら之に任せしが如きは、師道に於ける特色にして、而も効果の多大なることは、今日の進歩せる優生學、生物學の實證する所である。此の如き本邦獨特の教育的軌範、並に施設方法は、殆んど枚擧に遑あらずで、此等の史實は廣く史料を涉獵せば、殆んど際限なく、蒐集し得べきことと思ふ。即ち萬葉集は其時代の文化を象徴する資料たると同時に、飛鳥朝並に奈良朝時代の教育思潮をも窺ひ知るべく、懷風藻は隴ろながら滋賀朝當時の一时的文化の餘蔭、並に教育思潮を味ひ得べく、本朝文粹は最も雄辯に平安朝時代に於ける、文化の精華芬芳、並に各氏族其他諸家の教育觀を語る資料たるべく、其他鎌倉時代に於ける寺院の教育が、當時に於ける武士的精神を啓發醗酵せし酵母なるを知るべく、足利時代に於ける文化が、如何に支那元明文化の餘響を受けしものなるかを、推考し實證するに趣味多きが如き、其他徳

川時代に於ける諸般の文獻は、優に幾多の教育的資料を提供して餘りあるが如きものである。以上の資料に付、上下三千年間に潜在し、活躍せる民族精神の、脈絡と流潮とを抽象し、統括したらんには、油然として蔚然たる教育史と、教育學とを構造すること容易なるべきに、今日の教育學者の視線が、單に歐米の一方にのみ偏開し、毫も脚下の清泉沃野に展開せざるは、眞に不可思議の至りである。

教育は其國家民族の血であり、熱である所の靈、其物を啓發誘導するものである故に、此血と熱とは縦令他に如何様に優良の物ありとも、彼と此とを取換へることの出來ぬものである。即ち靈其物は掛替えを許さざる、生命其物であるから、隨て其特性を開發する原理原則は、是非とも其民族心理の發達せる歴史哲學、及び之と密接不離の關係を有する、一般の精神科學の價値に、須たねばならぬものである。生理學の説明によると血液を大別して凡そ四種類とする。而して血液の不足に由る、疲勞患者を救濟治療する場合に輸血すべき血液は、是非とも患者

の血液と、同質なるを要するのである。然らざれば縦令輸血するとも、効果なきのみか却て害をなすと云ふ。此學理は我等の祖先が、最初より血統を重んぜし理由を如實に説明するもので、同時に民族教育の根本原理を的確に認識することが出来る。若し大和島根の特産物たる、瞿麥の栽培に譬へて説明すれば、先づ第一に其種類は日本種なるを要し、次に其培養法は必ず其本質を失はざるべく、手入れすることが肝要である。其肥料の如きは如何様に、取捨選擇をなすとも、其種子丈は徹底的に掛替を許さぬのである。我皇室に於かせられて、其象徴とも申すべき、菊花の栽培にいとも尊き大御心を勞はせられ、而も雨露より滋き、王化の恵みに由つて、歳々咲き誇る精華芬芳は、廣く一般の臣庶にまで、陪觀を許させ給はるのである。余も一度畏くも陪觀の光榮に浴し、天恩の優渥なるに感泣せしものなるが、當時心に浮びたる直感は、我皇室の菊花栽培は、吾人教育家に、祖國の教育は、祖國固有の國民精神を、傳統的に啓發培養するにありとの、暗示諷

諭かと直感し、一入自己年來の主張の誤まらざりしことを心私かに喜びたる次第である。斯く皇室に於かせらるる、菊花培養の思召を回顧するに付けても、吾人の任務たる國民教育の目標、並に計畫は、恰も祖國に於ける、瞿麥なり菊花なりを培養する心得を以て、専心従事すべきものたることを、痛感する次第である。若し教育其物が、吾人の身體に於ける裝飾品附屬品の如く、又植物の肥料の如き關係にあるものならば、如何に外國品を採用するも可なるべきも、左にあらずして、國民の靈其物の教育なる以上は、其本質並に本體に付、徹底的考量を拂ふこそ、當然の歸結である。

以上の理由から、祖國の教育學は、是非とも特別和製たるべきことと思ふに、今日何れの教育學者も、悉く舶來の仕入品で、間に合はせて居るには、如何にも合點の出來兼ねることである。畢竟今日の教育家が、猫の目の如く毎日の様に其主義主張を變ずるは、確乎たる定見、即ち祖國の哲學文化並に教育學説の根柢乏

しき結果、止むなく茲に到りしもので、何時も何時も行き詰り勝ちなるは、當然の歸結である。是に付けても思ひ起すことは、故子爵井上梧陰大人の卓見である。大人が文相となるや、極力國史國文を主要の學科と認め、徹底的に其普及と、進展とを計られたるは、畢竟我精神科學に關する、凡ての文化の根源を培養せらるべき、深遠の考慮たりしを推察することが出来る。此點は特に教育學者の猛省を望む次第である。

元來今日の我學者は、歐米諸國を以て、一概に先進國として崇拜するものなるが之が抑もの誤りである。勿論科學は、近世に於て一日の長あるも、哲學は勿論文藝に於ては、東洋並に本邦の卓越し居ることは、世界に比類なき支那の文化と我惟神の哲學、其物が的確に之れを證明して餘りあるのに（委しくは拙著體系的國體新論を参照せられたし）一概に先進國呼張りすることは、卑下するにも程を知らぬことである。

更に感慨に堪えざる一事は、長くも明治天皇の嘗て祖國教育の實際に付、深く宸襟を惱ませられし御詠にして、想ひ起すだに真に九腸寸斷の感に打たるるのである。御詠に曰く

よる浪に打ちあげられて臥しながら花咲きにけりかはらなでしこ

御詠の真意は、那邊にあらせらるるや我等の付度すべき限りにあらざるも、愚考するところによれば、祖國の教育は、祖國々民精神の精を採り、粹を斟みて、啓發培養の資となすべきに、現在の教育家が茲に出でずして、漫りに外國の學說思潮にかぶれ、無批判的に雜然と西洋學說を輸入する爲め、憐れ折角の大和魂も、天真爛漫と咲き香ふことが不可能で、恰も河畔の瞿麥が、仇浪の打寄する爲めに、辛ふじて咲き出づるが如き有様なりとの、御諷諭ならんかと恐察せらるる次第である。當時この御詠は、東京市内の各大新聞に傳へられしこと故、必ずや當時の文部大臣は更なり、大學並に高等師範等の教育學者達も、一様に拜誦せし

に相違なかるべきも、以上の人々が等しく馬耳東風に聞き流せし様に思はるるは、よくもよくも歐米の學說に心酔中毒せしことの淺間しさを悲しむ次第である。余は當時此御詠を拜して、心私かに教育に軫念あらせらるる、大御心の切なるに感泣せしと同時に、飽く迄祖國の教育家としての自覺と、抱負とを強めたるものである。(希くは二十餘年來、余が實際に體驗し、身得しつつある活きたる實理的教育學に付批判ありたし)我福岡縣下の教育界を通觀するに付ても、遺憾ながら、以上に於ける愚見に、共鳴せらるゝ者甚だ乏しく何れかと言へば殆んど擧げて世間一様に、外國仕入れの一點張りに、汲々日も亦足らざるの觀あることは、眞に長大息に堪えざる次第である。何とかして曉鐘亂打茲に目醒むることの、一日も早からんことを、切望に堪えざる次第である。

武家時代に於ける家庭教育の一事例

本邦の武士道は、元々傳統的なる、國民性の發露に、外ならざるものなるが、而も之れを醗酵し、培養せし源根地は、全然武士の家庭である。當時に於ける、武士の家庭は、只管祖先を尊び、門地を重んじ、其名譽と繁榮とを、永遠に保持發揚せんが爲め、子女の教育に、極力盡瘁せしことは、眞に感賞に値すべきものである。縦令祖先傳來の門地にあらざるも、一代の功績に依り、新たに相當の地位を占めたる者は、一入其名譽と品位とを維持せんが爲め、極力子女の教育に、注意と努力とを拂ひしことは、自然の欲求であり、人情であつたのである。隨て武門に於ける、子女の教育は、自然家門の生命となり、延て眞劍味を帯びたるも當然の歸趣である。此場合に於て、最も必要なる條件は、師傅の選擇である。且其師傅の選擇に於ける一特色は、男子には女性の傳を擧げ、女子には男性の師を

當てしことである。これは畢竟女子の心情は、多く父親に肖、男子の心情は、多く母親に似ることの關係と思はる。即ち徳川家光の傳に春日局を擧げ、伊達綱村の守役に、淺岡を用ゐしは、其適例である。平安朝時代に於ける、有名的女性が多く其父親の薫陶に依つて養成せられ、鎌倉時代に於ける、著名の政治家、學者僧侶の立身が、何れも其母性の感化に原由せしことも、其適例である。補正行の蔭には、賢母の在りしこと、及び細川忠興夫人の躰方は、父親の功に在りしことも、的確の事實である。此等の關係は、畢竟男子特有の缺點を補足するに、女子固有の美點を以てし、女子本來の短所を裨助するに、男子本然の長所を以てするの、妙諦に歸するものと思ふ。是に付て思ひ起すことは、古代の醫術上に於ける事實である。例へば寒胃にも、自ら陰陽兩性の患者がある。陰性の寒胃には惡寒を覺え、陽性の寒胃には惡熱を感ず、而して之れが療法は、反對に陰性の患者は之を溫め、陽性の患者は之を冷すのである。此陰陽變和的療法の妙諦は、人性の

教育にも、應用せられしものと思はる。歐米諸國に於ても、家庭教育に於ける師傅の選擇は、同様の趣きありと聞く、此點は期せずして、符節を合せるが如き感がある。畢竟男兒の缺點とする所は、優美、憐愛、精緻、隱忍等にして、而も其反對に女子の短所たる剛毅、活潑、果斷、進取等の諸徳は、却て男子の長所とする所なるを以て、有無相通じ、長短相補ふは、教育上の妙諦たること、恰も如上醫術的療法の如きものである。故に賢母の膝下に、薫陶せられたる男子が、自然高尚優美の人格者となり、慈父の手許に陶冶せられたる女子が、自ら圓滿良淑の婦徳を發揮するも、偶然でないのである。此點は古代武士の家庭教育に於ける特異の事象である。此の如く總ての點にまで、周到の注意を拂ひ、體驗を積み、殆んど日も亦足らざるの思ひを以て、極力子女の教育に、熱注盡瘁せし、古代武士の家庭教育には、今更感賞の外ないのである。

余は嘗て本邦教育史料を蒐集涉獵せし際、小田原北條氏の、家庭教育に於ける

文獻に付、非常の興味と注意とを惹起せしことがあつた。即ち氏綱の息女崎姫（世田ヶ谷の吉良家に嫁ぎし賢婦人）の教育に付て、氏綱の弟幻庵入道が、自己の立身出世を忘れて、専心一門の子女教育に盡瘁せし事蹟は、眞に感涙の滂沱たりしを覺えざる程であつた。左に掲ぐる文書は、崎姫の世田ヶ谷に腰入りする際幻庵入道の手記に係るものにして、如何に用意の周到にして、家門の名譽と、子女の人格陶冶に、甚深の愛情を、注がれしかを推察することが出来るのである。

おぼえ（括弧内の註釋及圈點は余の施せしものに係る）

- 一、吉良殿御屋かたと申され^らべし、こなた御屋かたをば小田原御屋かたと申してよく候、又は小田原殿とも様とも申され候べし
- 一、御もじ（良人を指す）うちにては上さまと申候はん事勿論こなたへの文の上書稱號候はでかなはぬ事にて候、某殿といふ御名つけ候て尤のよし幻庵申候つると大かた殿へ申給ふべく候、これは正月の文より入り候べく候

一、大かた殿とは御たいはう（大方）と申されべく候但しこなた方への御文には大かたどのと柔らげ御書き候てよく候、心は一つにて候

大方（たいはう）これは畢竟譯しては同じ事なり
大上様（おうかみさま）とも申物也被管衆の言葉

一、吉良殿の御前へまいり（まいりは贈物の意味）候はん物上謁取次ぎ給ふべく候又後々の事は餘り隔心も却つてわるく候べく候

一、祝言のときの模様あなた（彼方のこと）のしたてたる（訓導の意味）人の様にせられ候べく候、大草は何と申などと尋ね申候ともおぼえ候はぬと返答候べく候

一、定めて常の三獻にて候べく候、但し衆などまいり候はばほんの式三獻にて候べく候、左様に候はゞ衆によく尋ねられ候て次第違はぬ様に候べく候、常の三獻にて候はゞ別義なく候程に様かましく（様體振るの意味）申されまじく候

一、三獻の三つ杯祝言のときは三つにて御まいり(酬の意味)候物にて候、節句、朔日には左候はぬとも苦しからず候、謂れは御成りの時は上に候土器(かわらげ)一つにて三度まいり(酬)候

一、引わたしの時加への事(加への銚子即ちヒサゲのこと)加へ出で候へとも加へ候はぬ物也、そのごとくに御沙汰候へく候、式三獻の時は勿論にて候

一、みうち(御内のこと)衆御禮申され候はん様體の事、

世田ヶ谷殿の御家につきたるおとな衆(老宰衆を指す)をば一列にその衆ばかり御あひしらい(接待)候べく候、

御次座敷の事

三の間邊にてひきわたしにて上藁相伴然るべく候、御次ぎと申ても障子一重の處などはあしかるべく候

一、堀越殿の御家よりつきてまいりたるおとなしゆ(老宰衆)をば一度に御あひ

しらい(接待)候べく候、あひしらいは同じ御事にて候

一、おとなしゆ(老宰衆)に御杯給候はん時、酌申候はん人なく候、上藁膳を押し遣り給ふて奥へ御立ち御杯に銚子添へて御出てまいらせ候、これにてよく候べく候

一、近習の衆御禮申候はん様體おとなしゆ(老宰衆)と少し引かへ候てよく候、これも座敷は同じ座敷にて候べく候、御杯はかり給候べく候杯の(以下文字不明に付略す)

一、おとな衆(老宰衆)近習衆御返禮の有様は一兩日過ぎ候て御引き用意注文副高橋幸左衛門を御頼み候て遣はされ候べく候

一、高橋幸左衛門に小袖御遣り候はんは三日の御祝言のうち(供御)過ぎ候時分御通りへ召し候て遣はされ候はんがこれは大かた殿へよく尋ね申され御意見の様に候べく候、若し自餘の人々思ふ所も候、無用と御意見候はゞ水主本之

助を使として宿へ御送り候べく候、さ候とも廣蓋には入れ候まじく候、つゞらなど風情に入候て取り出し左の手に据へ右の手にて上を押へまいらせ候べく候、一切下た手の人に御遣ひ候小袖は廣蓋には据へ候はぬ物にて候、譬へて申候、公方様より三管領始め面々に下され候も廣蓋沙汰候はず候、御一族の御方吉良殿、石橋殿、澁川殿などへ御服まいらせ候つる時も廣蓋は出で候はぬよし伊勢の備中物語り候、惣二などは近習候へば見及び候つるとて候、公家衆御けらいへも同じ事とて候、美濃土岐殿にて猿樂にいだされ候小袖を簾中より廣蓋に据へ出候時奉公の京衆笑ひ候つると惣二物語り申候、次ての才覺御心得候べく候

一、小田原御屋形より御禮儀候べく候、御使おとな衆(老宰衆)御あひしらい(接待)のごとく引わたしにて候へく候、近習の家にて候とも屋かたの御使にて候は、御あひしらいは同じかるべく候、屋かたは今管領にて候其御使は御奔走候はでかなはぬ事候

走候はでかなはぬ事候

- 一、一族の衆源三どの新三郎ごとき何れも禮申候はん使御屋かたの御使とは些し替り候べく候、大方殿へ御談合候てあひしらい給ふべく候
- 一、水主奎之助、比木圖書末々までも参り通ふべく候が御懇に候べく候、大屋、中田なども被官一分の者にて候御目掛け候て御用をも御付け候べく候、清水笠原御禮に参り候は、おとな衆御あしらいのごとくにて候べく候
- 一、御迎ひにまいりたるおとな衆へは次の日水主奎之助使としてよばば御あんならうと上臈より仰届よく候べく候但し如何候はんか幸左衛門に御談合候べく候御禮申され候後にも使御遣り候はんか幸左衛門意見に御任せ候べく候
- 一、新三郎かたへの御禮儀は春よく候へく候、大かた殿へ尋ね合はせ申され候べく候
- 一、安藝人衆御禮に参り候べく候、御あひしらい此程大かた殿になされつけたる

ま っ り
様にあるべく候

以上大略此分か

一、正月元三より鏡、子の日、七日、十五日祝ひ大かた殿此歲月なされつけたるごとくにて候べく候、その分幻庵申候つる由御断りよく候べく候

三月三日、五月五日、みな月、七月七日、八朔、九月九日何れも同じ

二、亥の子の餅の事近年小田原にしかく〜と御祝ひ候はぬまゝ様體人忘れ候、されども聞き及び申候分は御前へ参り候四方の上に積みたる餅を一つづゝ御挟み着座の面々衆は三管領山名一色以下の方々へ被進候其後誰にても御供衆御膳を持ちて御通りへ出でられ候て祇候の御供衆近習衆へ出さるゝよし承り候國々にある大名は代官を上げ拜領候、大裏の御様體をも西殿へ尋申候當關白最先に拜領候て次第に大納言まで拜領候、これは女房衆のいたさるゝより見え候由御物語り候、然らば御祝ひ候はん時は上臈へは直きに挟みて参らせら

れ候べく候、中臈へは上臈挟み候て出されしつる候、表は表にての御祝ひにて候べく候まゝ申事なく候、この祝ひは天曆の帝の御時康保年中紫式部仕出したるとふるき物には見え候、大裏の御まつりごと數々のうちにて候、武家の御祝も尊氏以來は公家に御なり候まゝ御祝ひにて候べく候、ついでに肴さいかく申候

三、座頭衆参り候はゞ御杯給御ひき給候べく候あなたかたに候はんずる座頭衆参り候はゞ御懇は候べく候、なれ〜しくは御置き候まじく候序に御心得候は座頭衆ととも男子の目の暗さにて候、女中がたへ案内なしに立入物にてはな〜候、天下其分にて候「やうしゆ」院殿の御時氏綱、桑市と申候檢校候つる平家（平家琵琶？）御聽き候として我々覺え候て唐紙の間へ一度召し候つる其時も「やうしゆ」院殿は奥の間に御座候、近年座頭衆と申せば何れも奥方へ参り候心得難く候へども御國風にて候まゝ一人して申されず候、但し民市な

ど參候は、御心安く御召び候ても苦しからず候、おさなくより御知り候又としよりぬるがふつづかの者にて候御懇ろに善く候べく候、佐市又同じ如きの者にて候その外はなれ／＼とは召し候まじく候、さて候とも座頭衆など三獻などのうちには御相伴には召しまじく候、御次ぎにて給候か又御またせ候て後に御肴給候て（此間文字不明）うこ（供御）の時は御相伴苦しからず候、點心と同然の事候斯様の事は平生も堅氣を召されつけ候て御置き候べく候、近年爰許定め方に候て際々とも候はず候駿河などは左様の事究めて式法式法に候べく候、御覺悟候べく候

十二月十六日

宗 哲 華 押

小田原北條氏と云へば、所謂當時に於ける、成り上りの豪族である。隨て同家の婚嫁に付ても、當時の豪族勢家に對し、子女の躰方に於て、萬一缺點を看出さ

るゝ場合あらば、直ちに成り上り者と、嘲笑せらるゝを以て、之を恐れ恥づる爲めに、一段と子女の教育に、注意と努力を拂ひしものと思はる。即ち入道幻庵は氏綱の實弟で、而も鞍打の大名人と云はれた、武道の達人であつた程であるから、若し普通の豪族權門の武士でありしならば、必ずや自由に驥足を伸ばし、花々しき職務を取つて、充分自己の權勢を、振舞ひしことなるべきに、幻庵入道は毫も左る野心なく、所謂椽の下力持ちとなつて、地味な家庭に於ける、子女の教育に没頭したる、其心懸には敬服の外ないのである。今日と雖も名門勢家の家庭教師と云へば、何れも捨扶持同様の待遇をなすが、普通であるのに、これと對照して、當時權勢比ぶものなき、小田原北條氏の一連枝が、名利を棄て、子女の教育に、甚深の注意と、努力とを拂はれた事實は、眞に景仰すべき美譽と稱すべきである。況して以上の手書を熟讀翫味するに於ては、幻庵入道の崎姫に對する、教育的愛情の甚深無量にして、到底今日に於ける、教育家の思ひ及ばざる

奥床しさを窺ひ知ることが出来るのである。教育と聊か縁遠き事柄なるも、古來有爲の男子、若しくは女性が、各々異性の英才秀傑を追慕憧憬せし事實は、其例乏しからざるものである。現に新らしき一例を擧ぐれば、故伊藤公の市杵島比賣神を、崇拜景仰せし如き、其最も顯著なるものである。公爵は嘗て朝鮮統監に任ぜられし際、本國に往復する都度、必ず嚴島神社に參詣せられたのである。こは全く朝鮮を統治するには、恩威並び行ふにありとの、信念を抱かれたことと、推察さるゝのである。而して此恩威合一は、市杵島比賣神の神徳であるから、公爵は必ず其神靈にあやかるところを、心願とせられたことと、追察することが出来る。眞の威嚴には、必ず其反面に、仁愛の眞情が存するものである。絶對的恩愛の發顯は、所謂眞の威嚴其物である。恩即威・仁愛即威嚴である。嚴の字に『いづくしみ』の訓あるは、此意義に外ならぬ。慈しみと嚴かとは、盾の両面で、裏觀すれば慈、表觀すれば嚴である。親の慈しみの心は、子に對して自ら嚴格なる

教への發露となるものである。此の如く慈即嚴・恩即威にして、始めて價值となるのである。教育的價值は、男女兩性の調和渾一によつて、創造することが出来る。即ち我古代に於ける武士道は、全く此教育的體驗に由つて、創造せる價值と云ふことが出来る。小田原北條氏の、家庭教育の一事例に付ても、當時に於ける家庭教育の如何に尊嚴にして、而も慈愛の深かりしかを、考察し得ると同時に、本邦に如上の如き價值多き、教育資料の豊富なることは、教育者の須らく猛省沈思すべきことと思はる。

ま っ り 終

昭和六年五月一日印刷
昭和六年五月四日發行

定價金一圓三拾錢
(上製)製本料二拾錢増

不許
複製

りつま

著者

神作濱吉

發行者

大葉久吉

印刷者

谷島晃

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所
關西專賣

東京市日本橋區本銀町三丁目
振替貯金口座東京二八〇番
大阪市西區阿波堀通四丁目
振替貯金口座大阪四三番

株式會社
株式會社
大阪實文館

神作濱吉著

體系的國體新論

定價金 一圓
製上 製本料金二拾錢増

思想的國難の叫び朝野に山彦しつゝある刻下の狀勢は、遂に「體系的國體新論」を生んだのである。著者

は界の元老として令名あり、兼て支那産業史並に祖國々體學の一大權威である。其の青年時

たる一世の國學者故西川須賀雄先生（佐賀出身の篤學者で當時安房神社の宮司であつた）

を激せられ、祖國々體の研究に没頭すること五十餘年、造詣頗る深きに拘らず未だ嘗て世

に公に發表せられなかつたが、曩に文部省の依頼により、福岡縣下に於ける同省主催の成人教育講座に

於て數回に互り講演せられたるもの即本書である。實に著者の得意なる國史國語の智識を基礎として我

が國體の真相を捉へ徹に入り細に互りて堂々數萬言、而も哲學的に渾然たる體系を附與せる點に於て絶

對に他の追隨を許さず、江湖諸君子幸に一讀を賜へ。

619
52



